

未就学児の硬筆筆記具の持ち方と書かれた点画の発達段階における変化

長野県松本深志高等学校 小林 比出代

はじめに 一本論考の意図—

本論考は、「未就学児の硬筆筆記具の持ち方に関する一考察 —書写教育の視点から—」（『書写書道教育研究 第24号』収録）に続くものである。前稿では、幼稚園年少児・年中児・年長児の硬筆筆記具の持ち方に関しての実態を調査分析し、調査対象の園児達に硬筆筆記具のいわゆる望ましい持ち方へのアプローチを試みた。さらには、その指導前後での硬筆筆記具の持ち方の変化を比較分析し、平仮名の基本点画となる各要素が調査対象児の各持ち方によりどのように書かれるのか検証した。前稿では多年にわたる同一人物間での比較調査は行っていない。本論考では、当研究調査を始めた初年度に「年少」だった園児達が、以降も継続的に硬筆筆記具のいわゆる望ましい持ち方について指導を受け続ける（詳細後述）との条件のもと「年中」（＝1年後）「年長」（＝2年後）と進級するに従い、硬筆筆記具の持ち方にどのような変化が起こるのかを分析する。その上で、同一人物間における硬筆筆記具の持ち方の変化に伴い、園児達が書く「線」がどのように変化するのか検証する。園児が書いた「線」を本検証の観点に沿った点画要素と重ね合わせて考察することにより、未就学児における硬筆筆記具の持ち方及び書かれた点画要素に関し、同一人物間で各発達段階においてどのような変化が起こるのか検討を試みる。

1. 未就学児の硬筆筆記具の持ち方に関する経年変化—持ち方の指導を行った場合—

1-1 前稿・本論考で試みた硬筆筆記具の持ち方指導

前稿での「軸太の三角鉛筆や軸太のフェルトペンの活用は幼児期の持ち方指導に有効である」との考察から、調査対象の幼稚園では2008年度から今年度まで硬筆筆記具の持ち方に関して以下のような指導を行ってきた。

- ①当該幼稚園の園児達が本研究調査を開始するまで日常的に用いていた市販の三角鉛筆（直径8mm）に替えて、ドイツ・ステッドラー社が開発した軸太の三角鉛筆「Noris ergosoft」（直径11mm）を用いて書写活動を行う。
- ②年少児や、軸太の三角鉛筆を用いても望ましい持ち方（後述）に難を示す園児には、軸の太さが2cm程の太いフェルトペンを活用する。フェルトペンの軸には親指と人差し指の位置をシールで明示し、子どもの理解を促す。

1-2 年少時から年長時における硬筆筆記具の持ち方の変化

前稿と同じく本論考における硬筆筆記具（以降「筆記具」、本調査の場合鉛筆）の持ち方の分類方法は、押木氏らの研究¹及び拙稿²に基づく。すなわち、筆記具を把持した際の指と筆記具の接触箇所を、筆記具の下部接触箇所3点（持ち方によっては2点）、及び筆記具上部接触箇所1点として、その上部接触箇所を、

上部接触箇所Aタイプ〔略称「Aタイプ」〕（＝望ましい持ち方）

：筆記具上部が右手人差し指の左側面・第2関節から第3関節の間で接触

上部接触箇所Bタイプ〔略称「Bタイプ」〕

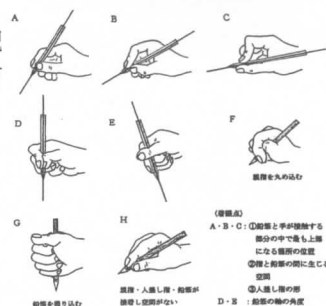
：筆記具上部が右手人差し指の左側面・人差し指付け根で接触

上部接触箇所Cタイプ〔略称「Cタイプ」〕

：筆記具上部が右手親指と人差し指との股の部分・親指付け根で接触

と分類する。さらには、鉛筆の軸の角度によって「Dタイプ」「Eタイプ」を、また、幼児期に見られる特徴的な持ち方として「Fタイプ」「Gタイプ」「Hタイプ」を設け、調査対象者の鉛筆の持ち方を分類する。

図1 持ち方の種類



グラフⅠ及び表1は、当該幼稚園の2008年度年少児（＝鉛筆の持ち方の指導を行う前の園児）が年中・年長へと進級する（この間「1-1」での指導を継続的に実施）に従っての、鉛筆の持ち方に関する調査結果である。なお、本調査で用いた筆記具は、年少時での調査で用いたものに統一するとの観点から、当該幼稚園が本調査以前から園児達に通常使用させていた市販の三角鉛筆（2B）とした。

【調査実施時期】 1回目：2008年7月（年少時） 2回目：2009年5月（年中時）
3回目：2010年7月（年長時）

【調査実施場所】 学校法人 円福学園 円福幼稚園（長野県長野市） 【調査対象者数】 87名

グラフⅠ 2008年～2010年の経年変化(%) ※表1 D～その他小計 '08 64.3% '09 34.4% '10 18.3% / '08年長児 33.0%

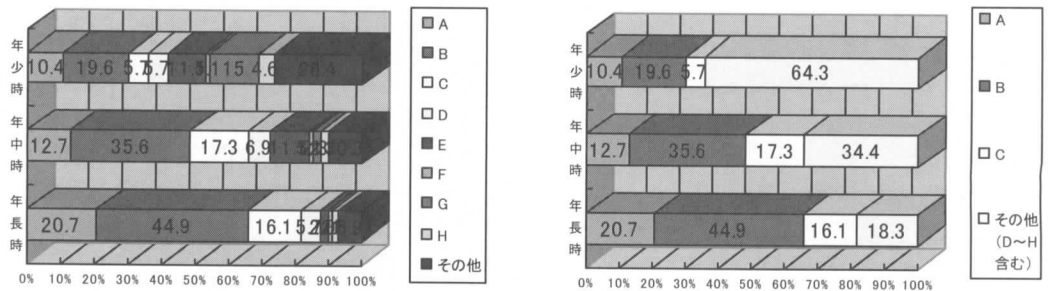


表1 (%)	A	B	C	D	E	F	G	H	その他
'08 年少時	10.4	19.6	5.7	5.7	11.5	1.1	15.0	4.6	26.4
'09 年中時	12.7	35.6	17.3	6.9	11.5	1.1	2.3	2.3	10.3
'10 年長時	20.7	44.9	16.1	5.7	2.3	1.1	0	2.3	6.9
'08 年長児	11.7	50.0	5.3	2.1	10.6	1.1	0	3.2	16.0

調査対象者の日常性から市販の三角鉛筆を用いて調査を行ったとの補助的な側面はあるが、グラフⅠ及び表1から、年少から年長へと進級するにつれてA及びBタイプが増加し、年長時でのそれぞれの割合は年少時と比べて倍増していることがわかる。その反面、年長時での、D～Hタイプを含む「その他」の持ち方は、年少時の3分の1以下に減少している。中でも、Gタイプは、年少時においてAタイプより高い比率で存在したのに対して、年中時に激減し、年長時では皆無になる。前稿での考察通り、Gタイプは年少時の特徴的な持ち方といえる。Eタイプも年長時に急減するが、Cタイプでは年中時に急増したまま年長時での変化は起こらない。D・F・Hタイプは3年間での大差がない。ここで、年長時での結果を、持ち方の指導を行っていない2008年度年長児を対象とした調査結果と比較すると、3年間持ち方の指導を行ってきた今年度年長児でのAタイプの割合は、2008年度年長児での数値の約2倍に増加し、一方で、「その他」の割合は半減以下になることがわかる。持ち方指導を行った場合のAタイプと行わなかった場合のAタイプの割合の差は、持ち方指導を行わなかった場合の「その他」と持ち方指導を行った場合の「その他」の割合の差に等しい。

このことから持ち方指導の有効性が立証されたと考えられる。先述のEタイプも、持ち方指導を行わなかった場合は3年間の数値に変化がないことから、今年度年長児のEタイプでの変化も持ち方指導の効用と推測できる。

これに対し、Bタイプは持ち方指導を行っていない場合の方が高い割合を示している。前稿での「幼児にはBタイプが把持しやすい持ち方」との考察が裏付けられた形になる。Bタイプは、持ち方指導を行った場合でも、各年齢層において、本調査で取り上げた全ての持ち方の中で最も高い割合を占め、かつ3年間の伸び率も著しい。持ち方指導を行っていない場合は指導を行った場合に比べてB・Eタイプの割合が高くなる分、C・Dタイプの割合が低くなる。F・G・Hタイプの変化に関しては両者の間で大きな違いがみられない。

2. 各持ち方で書かれた点画要素の変化—発達段階による比較と持ち方指導の有無による比較—

2-1 調査内容と分析方法

本論考では、前稿での調査結果との比較考察を試みるために、当該の園児達に前稿と同一の調査——平仮名の基本点画「止め」「払い」「はね」「曲がり」「折れ」「結び」の6要素及び幼児の身近に存在する図形を「調査用

1. 止めの用筆に関する検証 … ⑧・⑨ 2. 払いの用筆に関する検証 … ⑦・⑪・⑫・⑬・⑭・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻・㊼・㊽・㊾・㊿・㏰・㏱・㏲・㏳・㏴・㏵・㏶・㏷・㏸・㏹・㏺・㏻・㏼・㏽・㏾・㏿・㐀・㐁・㐂・㐃・㐄・㐅・㐆・㐇・㐈・㐉・㐊・㐋・㐌・㐍・㐎・㐏・㐐・㐑・㐒・㐓・㐔・㐕・㐖・㐗・㐘・㐙・㐚・㐛・㐜・㐝・㐞・㐟・㐠・㐡・㐢・㐣・㐤・㐥・㐦・㐧・㐨・㐩・㐪・㐫・㐬・㐭・㐮・㐯・㐰・㐱・㐲・㐳・㐴・㐵・㐶・㐷・㐸・㐹・㐺・㐻・㐼・㐽・㐾・㐿・㑀・㑁・㑂・㑃・㑄・㑅・㑆・㑇・㑈・㑉・㑊・㑋・㑌・㑍・㑎・㑏・㑐・㑑・㑒・㑓・㑔・㑕・㑖・㑗・㑘・㑙・㑚・㑛・㑜・㑝・㑞・㑟・㑠・㑡・㑢・㑣・㑤・㑥・㑦・㑧・㑨・㑩・㑪・㑫・㑬・㑭・㑮・㑯・㑰・㑱・㑲・㑳・㑴・㑵・㑶・㑷・㑸・㑹・㑺・㑻・㑼・㑽・㑾・㑿・㒀・㒁・㒂・㒃・㒄・㒅・㒆・㒇・㒈・㒉・㒊・㒋・㒌・㒍・㒎・㒏・㒐・㒑・㒒・㒓・㒔・㒕・㒖・㒗・㒘・㒙・㒚・㒛・㒜・㒝・㒞・㒟・㒠・㒡・㒢・㒣・㒤・㒥・㒦・㒧・㒨・㒩・㒪・㒫・㒬・㒭・㒮・㒯・㒰・㒱・㒲・㒳・㒴・㒵・㒶・㒷・㒸・㒹・㒺・㒻・㒼・㒽・㒾・㒿・㓀・㓁・㓂・㓃・㓄・㓅・㓆・㓇・㓈・㓉・㓊・㓋・㓌・㓍・㓎・㓏・㓐・㓑・㓒・㓓・㓔・㓕・㓖・㓗・㓘・㓙・㓚・㓛・㓜・㓝・㓞・㓟・㓠・㓡・㓢・㓣・㓤・㓥・㓦・㓧・㓨・㓩・㓪・㓫・㓬・㓭・㓮・㓯・㓰・㓱・㓲・㓳・㓴・㓵・㓶・㓷・㓸・㓹・㓺・㓻・㓼・㓽・㓾・㓿・㔀・㔁・㔂・㔃・㔄・㔅・㔆・㔇・㔈・㔉・㔊・㔋・㔌・㔍・㔎・㔏・㔐・㔑・㔒・㔓・㔔・㔕・㔖・㔗・㔘・㔙・㔚・㔛・㔜・㔝・㔞・㔟・㔠・㔡・㔢・㔣・㔤・㔥・㔦・㔧・㔨・㔩・㔪・㔫・㔬・㔭・㔮・㔯・㔰・㔱・㔲・㔳・㔴・㔵・㔶・㔷・㔸・㔹・㔺・㔻・㔼・㔽・㔾・㔿・㕀・㕁・㕂・㕃・㕄・㕅・㕆・㕇・㕈・㕉・㕊・㕋・㕌・㕍・㕎・㕏・㕐・㕑・㕒・㕓・㕔・㕕・㕖・㕗・㕘・㕙・㕚・㕛・㕜・㕝・㕞・㕟・㕠・㕡・㕢・㕣・㕤・㕥・㕦・㕧・㕨・㕩・㕪・㕫・㕬・㕭・㕮・㕯・㕰・㕱・㕲・㕳・㕴・㕵・㕶・㕷・㕸・㕹・㕺・㕻・㕼・㕽・㕾・㕿・㖀・㖁・㖂・㖃・㖄・㖅・㖆・㖇・㖈・㖉・㖊・㖋・㖌・㖍・㖎・㖏・㖐・㖑・㖒・㖓・㖔・㖕・㖖・㖗・㖘・㖙・㖚・㖛・㖜・㖝・㖞・㖟・㖠・㖡・㖢・㖣・㖤・㖥・㖦・㖧・㖨・㖩・㖪・㖫・㖬・㖭・㖮・㖯・㖰・㖱・㖲・㖳・㖴・㖵・㖶・㖷・㖸・㖹・㖺・㖻・㖼・㖽・㖾・㖿・㗀・㗁・㗂・㗃・㗄・㗅・㗆・㗇・㗈・㗉・㗊・㗋・㗌・㗍・㗎・㗏・㗐・㗑・㗒・㗓・㗔・㗕・㗖・㗗・㗘・㗙・㗚・㗛・㗜・㗝・㗞・㗟・㗠・㗡・㗢・㗣・㗤・㗥・㗦・㗧・㗨・㗩・㗪・㗫・㗬・㗭・㗮・㗯・㗰・㗱・㗲・㗳・㗴・㗵・㗶・㗷・㗸・㗹・㗺・㗻・㗼・㗽・㗾・㗿・㘀・㘁・㘂・㘃・㘄・㘅・㘆・㘇・㘈・㘉・㘊・㘋・㘌・㘍・㘎・㘏・㘐・㘑・㘒・㘓・㘔・㘕・㘖・㘗・㘘・㘙・㘚・㘛・㘜・㘝・㘞・㘟・㘠・㘡・㘢・㘣・㘤・㘥・㘦・㘧・㘨・㘩・㘪・㘫・㘬・㘭・㘮・㘯・㘰・㘱・㘲・㘳・㘴・㘵・㘶・㘷・㘸・㘹・㘺・㘻・㘼・㘽・㘾・㘿・㙀・㙁・㙂・㙃・㙄・㙅・㙆・㙇・㙈・㙉・㙊・㙋・㙌・㙍・㙎・㙏・㙐・㙑・㙒・㙓・㙔・㙕・㙖・㙗・㙘・㙙・㙚・㙛・㙜・㙝・㙞・㙟・㙠・㙡・㙢・㙣・㙤・㙥・㙦・㙧・㙨・㙩・㙪・㙫・㙬・㙭・㙮・㙯・㙰・㙱・㙲・㙳・㙴・㙵・㙶・㙷・㙸・㙹・㙺・㙻・㙼・㙽・㙾・㙿・㚀・㚁・㚂・㚃・㚄・㚅・㚆・㚇・㚈・㚉・㚊・㚋・㚌・㚍・㚎・㚏・㚐・㚑・㚒・㚓・㚔・㚕・㚖・㚗・㚘・㚙・㚚・㚛・㚜・㚝・㚞・㚟・㚠・㚡・㚢・㚣・㚤・㚥・㚦・㚧・㚨・㚩・㚪・㚫・㚬・㚭・㚮・㚯・㚰・㚱・㚲・㚳・㚴・㚵・㚶・㚷・㚸・㚹・㚺・㚻・㚼・㚽・㚾・㚿・㜀・㜁・㜂・㜃・㜄・㜅・㜆・㜇・㜈・㜉・㜊・㜋・㜌・㜍・㜎・㜏・㜐・㜑・㜒・㜓・㜔・㜕・㜖・㜗・㜘・㜙・㜚・㜛・㜜・㜝・㜞・㜟・㜠・㜡・㜢・㜣・㜤・㜥・㜦・㜧・㜨・㜩・㜪・㜫・㜬・㜭・㜮・㜯・㜰・㜱・㜲・㜳・㜴・㜵・㜶・㜷・㜸・㜹・㜺・㜻・㜼・㜽・㜾・㜿・㝀・㝁・㝂・㝃・㝄・㝅・㝆・㝇・㝈・㝉・㝊・㝋・㝌・㝍・㝎・㝏・㝐・㝑・㝒・㝓・㝔・㝕・㝖・㝗・㝘・㝙・㝚・㝛・㝜・㝝・㝞・㝟・㝠・㝡・㝢・㝣・㝤・㝥・㝦・㝧・㝨・㝩・㝪・㝫・㝬・㝭・㝮・㝯・㝰・㝱・㝲・㝳・㝴・㝵・㝶・㝷・㝸・㝹・㝺・㝻・㝼・㝽・㝾・㝿・㞀・㞁・㞂・㞃・㞄・㞅・㞆・㞇・㞈・㞉・㞊・㞋・㞌・㞍・㞎・㞏・㞐・㞑・㞒・㞓・㞔・㞕・㞖・㞗・㞘・㞙・㞚・㞛・㞜・㞝・㞞・㞟・㞠・㞡・㞢・㞣・㞤・㞥・㞦・㞧・㞨・㞩・㞪・㞫・㞬・㞭・㞮・㞯・㞰・㞱・㞲・㞳・㞴・㞵・㞶・㞷・㞸・㞹・㞺・㞻・㞼・㞽・㞾・㞿・㟀・㟁・㟂・㟃・㟄・㟅・㟆・㟇・㟈・㟉・㟊・㟋・㟌・㟍・㟎・㟏・㟐・㟑・㟒・㟓・㟔・㟕・㟖・㟗・㟘・㟙・㟚・㟛・㟜・㟝・㟞・㟟・㟠・㟡・㟢・㟣・㟤・㟥・㟦・㟧・㟨・㟩・㟪・㟫・㟬・㟭・㟮・㟯・㟰・㟱・㟲・㟳・㟴・㟵・㟶・㟷・㟸・㟹・㟺・㟻・㟼・㟽・㟾・㟿・㠀・㠁・㠂・㠃・㠄・

調査用紙

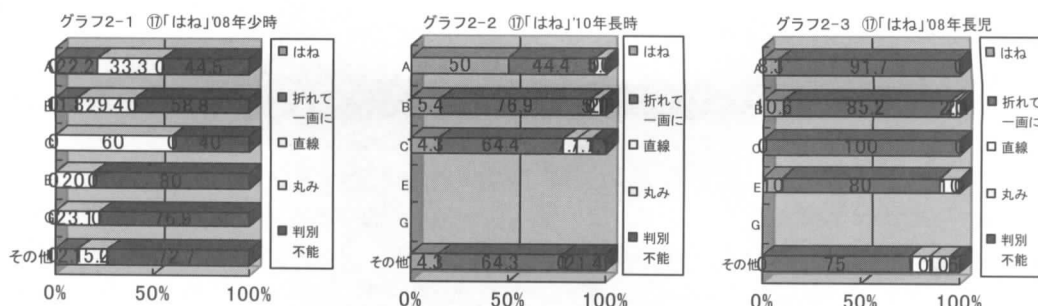
2-2 調査結果及び比較考察

- 全ての要素において、年少時は判断不能となる率が年中時・年長時より圧倒的に高い。
- 年齢が上がるとともに判断不能の割合は確実に下がる。特に年長時では望ましい形や用筆の出現率が高くなる。
- 「止め」「払い」「折れ」では、年齢層を問わず、Aタイプで望ましい形や用筆の出現する割合が高い。
- 同じ点画要素や図形でも、見本が大きく提示される場合は、小さく提示される場合よりも再現率が高い。この傾向は年少時に最も強い。

(※以上、紙面の都合上データ割愛)

2-2-1 はねの用筆について〔⑩⑪「け」1画め収筆部「はね」の比較、及び字大約3cmと約2cmでの比較〕

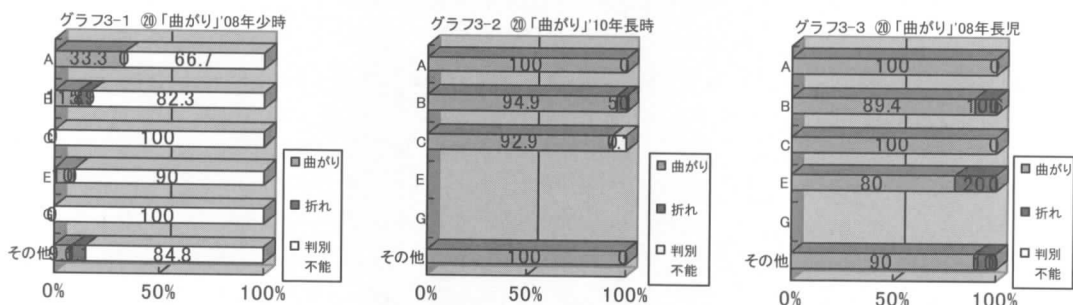




(%)		'08 年 少 時						'10 年 長 時				'08 年 長 児				
⑪	はね	0	0	0	10.0	0	0	44.45	20.5	14.3	14.3	8.3	10.6	0	10.0	0
	折れて一面に	33.3	11.8	20.0	0	0	15.2	44.45	74.4	78.6	64.3	91.7	85.2	100	80.0	75.0
	直線	22.2	29.4	40.0	20.0	23.1	15.2	0	0	7.1	0	0	2.1	0	10.0	10.0
	丸み	0	0	0	0	0	0	11.1	5.1	0	0	0	2.1	0	0	10.0
	判別不能	44.5	58.8	40.0	70.0	76.9	69.6	0	0	0	21.4	0	0	0	0	5.0
⑫	はね	0	0	0	0	0	0	50.0	15.4	14.3	14.3	8.3	10.6	20.0	10.0	0
	折れて一面に	22.2	11.8	0	0	0	12.1	44.4	76.9	64.4	64.3	91.7	85.2	60.0	80.0	75.0
	直線	33.3	29.4	60.0	20.0	23.1	15.2	0	0	7.1	0	0	2.1	0	10.0	10.0
	丸み	0	0	0	0	0	0	5.6	5.1	7.1	0	0	2.1	20.0	0	10.0
	判別不能	44.5	58.8	40.0	80.0	76.9	72.7	0	2.6	7.1	21.4	0	0	0	0	5.0

'10年長時も'08年長児も、それぞれでの傾向は見本の大きさに関係なく近似している。しかし、'08年長児は、持ち方の違いにかかわらず「はね」の出現率が極めて低いのにに対し、'10年長時のAタイプでは、約半数が「はね」の用筆を再現している。'10年長時は他の持ち方においても「はね」の出現率が高い。年少時にはどの持ち方でも「はね」がほとんど再現されないことを勘案すると、持ち方の指導が功を奏した結果と捉えることができる。

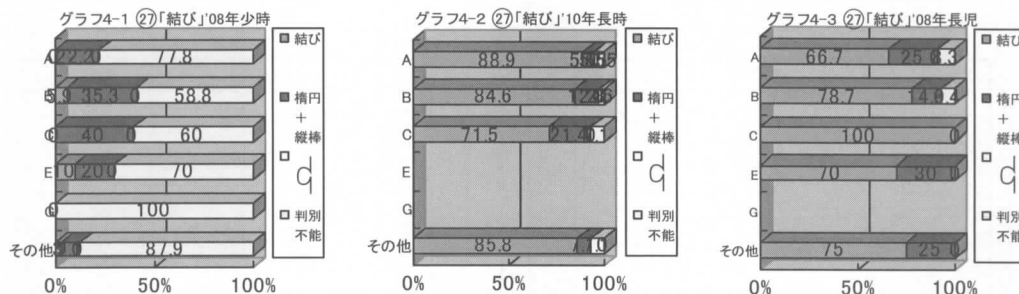
2-2-2 曲がりの用筆について〔⑳「と」2画め送筆部「曲がり」の比較〕



⑳ (%)	'08 年 少 時						'10 年 長 時				'08 年 長 児				
	A	B	C	E	G	他	A	B	C	他	A	B	C	E	他
曲がり	33.3	11.8	0	10.0	0	9.1	100	94.9	92.9	100	100	89.4	100	80.0	90.0
折れ	0	5.9	0	0	0	6.1	0	5.1	0	0	0	10.6	0	20.0	10.0
判別不能	66.7	82.3	100	90.0	100	84.8	0	0	7.1	0	0	0	0	0	0

前稿での考察から、「曲がり」は低年齢層にとって難易度が高い用筆であることが明らかになった。しかし、'10年長時も'08年長児も、Aタイプでは100%「曲がり」の用筆が出現している。ただし、'08年長児のAタイプ以外の持ち方では「折れ」に代わる傾向が'10年長時よりも多く見受けられる。

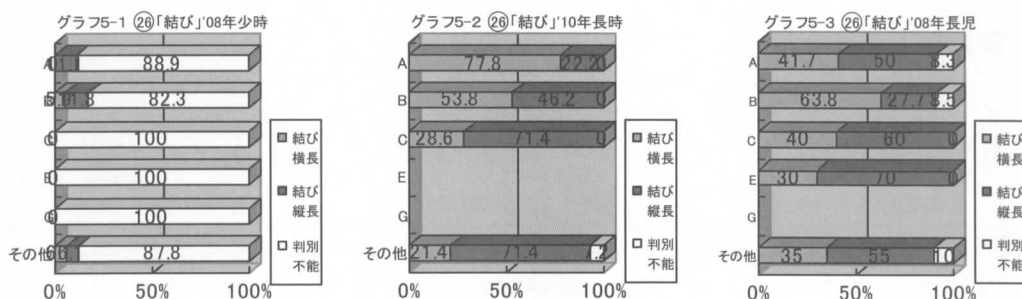
2-2-3 結びの用筆について〔②⑦「す」2画め「結び」の用筆に関する比較〕



②⑦ (%)	'08 年 少 時							'10 年 長 時				'08 年 長 児				
	A	B	C	E	G	他		A	B	C	他	A	B	C	E	他
結び	0	5.9	0	10.0	0	3.0		88.9	84.6	71.5	85.8	66.7	78.7	100	70.0	75.0
横円+縦棒	22.2	35.3	40.0	20.0	0	9.1		5.55	12.8	21.4	7.1	25.0	14.9	0	30.0	25.0
c	0	0	0	0	0	0		0	0	0	7.1	0	0	0	0	0
判別不能	77.8	58.8	60.0	70.0	100	87.9		5.55	2.6	7.1	0	8.3	6.4	0	0	0

前稿において、幼児は「結び」の用筆を概念的に捉えるのが困難であると考察した。しかし、'10年長時は'08年長児に比べて「結び」の用筆が高い割合で出現していることがわかる。中でもAタイプには、その傾向が顕著に表れている。持ち方の指導を行ってきた成果の一端とも考えられる。

2-2-4 結びの形について〔②⑥「よ」2画め「結び」の形に関する比較〕



②⑥ (%)	'08 年 少 時							'10 年 長 時				'08 年 長 児				
	A	B	C	E	G	他		A	B	C	他	A	B	C	E	他
結び横長	0	5.9	0	0	0	6.1		77.8	53.8	28.6	21.4	41.7	63.8	40.0	30.0	35.0
結び縦長	11.1	11.8	0	0	0	6.1		22.2	46.2	71.4	71.4	50.0	27.7	60.0	70.0	55.0
判別不能	88.9	82.3	100	100	100	87.8		0	0	0	7.2	8.3	8.5	0	0	10.0

年少時には「結び」の用筆のみならず形の再現も極めて難しい。'08年長児でもその出現率は半数に届かない。しかし、'10年長時のAタイプでは8割弱が望ましい形を再現している。これも持ち方指導の効用と推測できる。

2-3 まとめ

'10年長時と'08年長児との差は、難易度が高いと考えられる用筆や形、特に「はね」「結び」で顕著となる。以上の結果から、筆記具の持ち方指導は、本来の指導目的だけにとどまらず、幼児には理解が難しい「はね」「結び」「曲がり」の指導に関しても有用に働く可能性が高いと考えられる。

3. 未就学児における硬筆筆記具の持ち方の変化と書かれた点画要素の変化に関する検証

3-1 調査内容と分析方法

本章では、同一人物間での筆記具の持ち方の変化と書かれた点画要素の変化について、年少時から年長時の3年間にわたる追跡調査を行い、その結果を年齢と持ち方別に比較分析する。

表2 年少時→年中時→年長時の持ち方に関する経年変化(名) ※■：鉛筆の持ち方に変化がない園児数 空欄＝0名

		年 中 時									
		計	A	B	C	D	E	F	G	H	他
年少時	計	11	31	15	6	10	1	2	2	9	
	A	9	1	4	3	1					
	B	17	4	9	2		2				
	C	5	1	1	1	2					
	D	5		3		1			1		
	E	10	1	3	2	1				1	2
	F	1		1							
	G	13	2	3	3		3		1		1
	H	4		2				1			1
	他	23	2	5	4	1	5			1	5

		年 長 時									
		計	A	B	C	D	E	F	G	H	他
年中時	計	18	39	14	5	2	1	0	2	6	
	A	11	2	8							1
	B	31	7	16	3	2	1			1	1
	C	15	4	7	2						2
	D	6		1	3	2					
	E	10	1	4	2		1	1			1
	F	1	1								
	G	2		1		1					
	H	2			1					1	
	他	9	3	2	3						1

		年 長 時									
		計	A	B	C	D	E	F	G	H	他
年少時	計	18	39	14	5	2	1	0	2	6	
	A	9	1	6		2					
	B	17	4	10	1	1					1
	C	5		3	2						
	D	5	1	1	2	1					
	E	10	3	4	1					1	1
	F	1			1						
	G	13	2	6	1	1	1				2
	H	4	3							1	
	他	23	4	9	6		1	1			2

- 表2の中で、
- a. 年少時・年中時はAタイプ以外を持ち方で、年長時にAタイプとなった園児 16名
 - b. 年少時はAタイプ以外を持ち方で、年中時・年長時はAタイプの園児 2名
 - c. 年少時・年中時はAタイプで、年長時はAタイプ以外を持ち方となった園児 1名
 - d. 年中時のみAタイプで、年少時・年長時はAタイプ以外を持ち方の園児 8名
 - e. 年少時はAタイプで、年中時・年長時はAタイプ以外を持ち方となった園児 7名
 - f. 3年間持ち方に変化がない園児 (全員Aタイプ以外を持ち方) 7名
- 以上計41名の経年変化について検証を試みる。

3-2 調査結果及び比較考察

本章では、先述の41名が、年少時・年中時・年長時に「調査用紙」の①～③⑤の各要素をどのように書き表したか、「2-2」と同じ44の観点によって分析し、比較考察を試みる。紙面の都合上、ここでは象徴的な14の項目の調査結果を取り上げる。(以下表中、年長時＝「長」・年中時＝「中」・年少時＝「少」と表記)

3-2-1 止めの用筆について〔⑨「へ」収筆部「止め」の比較〕

⑨	a																b		c	d								e									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7				
止め	長	長	長中	長中	長中	長中	長中	長	長中	中	長中	長	長	長中	長	長中少		長	長中少	長中	長中少	長		長中	長	長	長中	長中少	少	長中少	長中少	長中少	長中	長中少			
抜く						中		中		長					中		長	中				長					長中少	長中			長中		長中少				
判別不能	中少	中少		少	少	少	少	少		少		少	中少	中少		少	中少	少		少		中少	中少	少	中少	中少	少					少	少				
⑨	f							年少時は望ましい用筆を再現できる割合が全体的に低い、その中における「とめ」の出現率が高い。																													
	1	2	3	4	5	6	7																														
止め	長中	長中	長中	長	長中少	長中	長																														
抜く				中			中少																														
判別不能		少	少		少																																

年少時は望ましい用筆を再現できる割合が全体的に低いが、その中においてeは「とめ」の出現率が高い。

3-2-2 払いの用筆について〔⑦「し」収筆部「払い」の比較〕

⑦	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
払い			長	中	長		長		長	長			長		長	長					長					中			長	長				
止め	長	長		長		長		長		中	長	長		長	中	中	長	中	長	中	中	長	長	長	長	長	長	中	中	中	中	中	中	中
判別 不能	少	中	少	少	少	少	中	少		少	少	少	少		少					少	中	中	少	中	中	少	少	少			少	少	少	少

⑦	f						
	1	2	3	4	5	6	7
払い	長中	中少	長中	長	長	中少	中
止め			長		中	中	長
判別不能	少			少			

a の年長時における「払い」の出現率が高い。また、f の年中時における「払い」の出現率が高いが、これらは全て B タイプの持ち方である。

〔24「の」収筆部「払い」の比較〕

②4	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
払い				長				長	長				長		中	長		中				長		中				長	中	中	中		長	
止め	長中	長中	長中	長中	長中	長中	長	中	中	長	長	長		長中	長	中少	長	長	長中	長中	長中			長	長中	長中	長中	長中	少	長	長	中	中	長中
判別不能	少	少	少	少	少	少	中少	少	少	少	中少	中少	中少	中少	中少	中少	中少	少	少	少	少	少	中少	長中少	少	少	中少	少		少		少	少	少

②4	f						
	1	2	3	4	5	6	7
払い							長中
止め	長中	長中	長中	長	長中	長中	少
判別不能	少	少	少	中少			

持ち方の違いにかかわらず、年少時は「の」を再現できる割合そのものが低い。しかし、e では「の」自身の再現率が高い上に、「払い」が出現する割合も 3 年間にわたり他の場合に比べて高い。

3-2-3 払いの方向について〔24「の」収筆部「払い」の方向に関する比較〕

②4	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
左下	長中	長	長	長	長	中		長中	長				長			長	長	長中		長中		長			中					長中		長中	中	
真下						中				長				中	長中				中		中				長		中	少	少	長			長	
右下		中	中	中	長	長	長		中		長	長		長		中少		長		長				長	中	長	長	長中	長中		中	長中		
判別不能	少	少	少	少	少	少	中少	少	少	中少	中少	中少	中少	少	少		中少	少	少	少	少	中少	長中少	少	少	中少	少			少		少	少	少

②4	f						
	1	2	3	4	5	6	7
左下	中		長中		長	中少	長
真下		中					中少
右下	長	長		長	中少	長	
判別不能	少	少	少	中少			

「の」の収筆部が「払い」となって左下へ向かう割合は全体的に低いが、aの年長時ではその出現率が高い。

「の」の収筆部が「払い」となって左下へ向かう割合は全体的に低いが、a の年長時ではその出現率が高い。

3-2-4 はねの用筆について〔14「こ」1画め収筆部「はね」の比較〕

⑭	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
はね			中				長		長			長		長	長	長		長				少					長		長	長		長		
折れて 一画に	長	長中 少	長	長	長	長中		長中	中少	長	長	中	長	中		中	長	中	長中 少	長中	長中	長中	長中	長中	長	長		長		中少		長中 少		長中 少
直線										中少			中														中							
丸み				中	中										中	少									中	中		少		中		中		
判別 不能	中少		少	少	少	少	中少	少			中少	少	少	少	少		中少	少			少	少	少	少	少	中少	少			少		少	少	

⑭	f						
	1	2	3	4	5	6	7
はね						中少	
折れて 一画に	中	長中	長中	長	長中少	長	中少
直線		少					
丸み			少				
判別 不能	長少			中少			

年少時の「はね」はそのほとんどが判別不能だが、e では、「はね」の用筆にはならなくとも、折れた後新たな一画にする形で体现している割合が高い。「はね」は幼児にとって難易度の高い用筆であるが、a は年長時での出現率が他の場合に比べて高い。

3-2-5 曲がりの用筆について〔⑳「と」2画め送筆部「曲がり」の比較〕

㉔	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
曲がり	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
折れ		中	中					中			中	中			中	中							長		長	長			長					中
判別不能	中	少		少	少	少	少	中	少	少	中	少	少	少	少	少	中	少			少	少	中	少	少	中	少	少	少		少		中	少

㉔	f						
	1	2	3	4	5	6	7
曲がり	長	長	長	長	長	長	長
折れ							中
判別不能	少	少	少	少		少	少

低年齢層ほど難易度が高い「曲がり」ではあるが、eの年少時における判別不能の割合は他の場合より低い。

低年齢層ほど難易度が高い「曲がり」ではあるが、e の年少時における判別不能の割合は他の場合より低い。

3-2-6 折れの用筆について〔㉒「N」右下「折れ」の比較〕

③	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
折れ	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
丸み	中				少			少				中		中										中	中									
判別 不能	少	少	少			少					中		中	中		少		少	少		少	中	少	少		中	少						少	

③	f						
	1	2	3	4	5	6	7
折れ	長	長	長	長	長	長	長
丸み							少
判別 不能	少	少		少	少		

eの年少時における「折れ」の出現率が極めて高い。年中時及び年長時で持ち方による大差がない。

e の年少時における「折れ」の出現率が極めて高い。年中時及び年長時では持ち方による大差がない。

㉔「へ」送筆部「折れ」の比較

㊦	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
折れ	長	長	長中少	長中	長中	長中		長	長中	長中	長		長	長中	長中	長中少	長	長中	長中	長中	長中少	長	長	長		長	長	長中	長中	長中	中少	長中	長中	長
丸み							長中	中			中	長			中										長		中			長		中	中少	
判別不能	中少	中少		少	少	少	少	少		少	少	中少	中少	少			中少	少		少		中少	中少	中少	中少	中少	中少	少					少	少

⑨	f						
	1	2	3	4	5	6	7
折れ	長中	長中	長中		長中少	長中	長中
丸み			少	長中		中少	少
判別不能	少	少		少			

「N」での特徴と同様に、eの年少時における「折れ」の出現率は他の場合よりも高い。

〔10折線における折れ部の比較〕

⑩	a																b		c	d								e							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	
折れ	長	長中	長中	長	長中	長中	長	長中	長	長	長	長	長中	長中	長	長中	長中	長	長	長中		長	長	長中		長中少	長	長	長中	長	長中	長中	長中	長	長中
丸み	中少			中			中		中少	中	中少	中			中少	少	中	少	中	少		長中少		中		長中		中	少	中	少		中	少	
判別不能		少	少	少	少	少	少	少		少		少	少					少			少	中少	少	少	少	少	少					少	少		

⑩	f						
	1	2	3	4	5	6	7
折れ	長中	長中	長	長中	長中少	長	長中少
丸み			中			中少	
判別不能	少	少	少	少			

eの年少時は、「折れ」の用筆にはならなくても、判別不能となる割合が他の場合よりも低い。

eの年少時は、「折れ」の用筆にはならなくても、判別不能となる割合が他の場合よりも低い。

3-2-7 結びの用筆について〔29「む」2画め送筆部「結び」の用筆に関する比較〕

㊤	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
結び	長	長	長中			長中			長中			長		長	長	長中少	長	長	長中	長中							長	長中	長	長中	長	長	長	長中
0 プラス L		中		長中	長中			長中		長	長中	中		長		中		中			長中	中		長中	長中	長			中少		中少		中	
d							長															長	長											
判別 不能	中少	少	少	少	少	少	少	中少	少		中少	少	少	中少	中	少		中少	少	少	少	少	少	中少	少	中少	中少	少		少		中少	少	長

㊤	f						
	1	2	3	4	5	6	7
結び	長中	長	長		長中	長	中
0 プラス L			中	中	少	中	
d							長
判別 不能	少	中少	少	少	長	少	少

持ち方の別にかかわらず、年少時は「結び」の用筆を再現できる割合が壊滅的な状態にある。年長時でかろうじて望ましい用筆が多くなるが、他の点画要素の用筆に比べるとその出現率は低い。特に d では、持ち方及び年齢の如何にかかわらず「結び」の用筆が出現する割合は低い。

持ち方の別にかかわらず、年少時は「結び」の用筆を再現できる割合が壊滅的な状態にある。年長時でかろうじて望ましい用筆が多くなるが、他の点画要素の用筆に比べるとその出現率は低い。特に d では、持ち方及び年齢の如何にかかわらず「結び」の用筆が出現する割合は低い。

3-2-8 結びの形について〔26「よ」2画め送筆部「結び」の形に関する比較〕

㊾	a																b		c	d								e							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	
結び横長		長		長		長中		長	長			長	長	長	長	長中			長		長				長				中		長		長		
結び縦長	長	中	長中	中	長中		長	中	中		長	長			中	中	少	長	長中	中		長	中		長中		長	長中	長中	長中	中少	長中	中	長	
判別不能	中少	少	少	少	少	少	中少	少	少		中少	中少	中少	中少	中少	少		中少	少	少	中少	少	中少	長中少	少	中少	長中少	中少	少		少		少	少	中

㉔	f						
	1	2	3	4	5	6	7
結び 横長	長						長中
結び 縦長	中少	長中	長少	長中	長中少	長中	少
判別 不能		少	中	少		少	

年少時及び年中時での「結び」の出現率は全般にわたって低い、aの年長時だけはその割合が高くなる。また、b・c・d・e・fにおいても、年長時の方が、それぞれの年少時や年中時よりも「結び」そのものの出現率は若干高くなる。しかし、望ましい形になる割合は低い。年長時も含め、「結び」の形は他の点画要素より再現される率が低い、fは、年齢層が低い段階から、その形が縦長ではあっても「結び」を再現できる割合が高い。

3-2-9 図形について

㉔	a																b		c	d								e						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7
正方形						長				長						長																		中
長方形	長		長中		長中			長								中	長	長	中	長	長							長			長			
歪んだ四角形	中	長中少		長中		中	長中	中	中少	長中	長中	長中	長中	長中	長中	少	中	中	長	中	中	長	長中	長中	長中	長	長	中少	長中少	長中少	長中少	長中少	長中少	長
判別不能	少		少	少	少	少	少	少	少	少	少	少	少	少	少		少	少	少	少	少	中少	少	少	少	中少	中少					少	少	

㉔	f						
	1	2	3	4	5	6	7
正方形							
長方形					長		長
歪んだ四角形	長中少	長中	長中	長中	中少	長中	中少
判別不能		少	少	少		少	

年少時では、e のみが、求められた形ではない歪んだ形であっても、角形を再現できる割合が高い。年少時の場合、e 以外はほとんどが判別不能である。また、年中時・年長時においても、持ち方の別に関係なく、一般にわたってその再現率は低い。

年少時では、eのみが、求められた形ではない歪んだ形であっても、四角形を再現できる割合が高い。年少時の場合、e以外はほとんどが判別不能である。また、年中時・年長時においても、持ち方の別に関係なく、全般にわたってその再現率は低い。

3-3 まとめ

- 3年間の追跡調査においても、年少時は判別不能な書きぶりが圧倒的に多い。年少時は、持ち方の指導以前の段階とも考えられる。しかし、「止め」「払い」「折れ」(付随的に「はね」「曲がり」)においては、年少時にAタイプのいわゆる望ましい持ち方ができると、望ましい用筆が再現できる傾向が見受けられる。
- 全般的に、年長時においてAタイプの持ち方である場合に、望ましい用筆や形を再現できる割合が最も高くなる傾向にある。また、年中時及び年長時では、Aタイプ以外の持ち方であっても、年少時でのAタイプより用筆・形ともに望ましい在り方の出現率が高くなる。
- ところが、年少時にAタイプの持ち方で、かつ用筆や形の望ましい在り方が再現(望ましい用筆や形で書くことが)できる場合は、その後年中時や年長時での持ち方がAタイプではなくなったとしても、望ましい用筆や形を体现できる確率が高い。これは、年中時のみAタイプの場合との比較からも明らかである。このことから、早期に望ましい持ち方が体现でき、かつ望ましい用筆や形が再現できる場合は、上の年齢層で望ましい持ち方を習得した場合よりも、用筆や形の望ましい在り方を後の書写活動の素地として反映できる可能性が高いと考えられる。

おわりに

未就学児への持ち方指導は、本来の目的である筆記具の望ましい持ち方の育成だけではなく、望ましい用筆や形の書き方に関しても副次的な効用をもたらしていることが明らかとなった。

本論考やこれまでの考察から、筆記具の持ち方指導と望ましい点画要素の書き方指導は表裏一体の関係にあるといえる。双方の指導を体系的に整え、かつ、未就学児への書写指導と就学後の書写指導とをスパイラルな関係として捉えた上で、両者が複合的に絡み合う指導の在り方を模索していきたい。

【謝辞】 前稿での調査に引き続き、全面的なご協力をくださいました円福幼稚園に深謝申し上げます。

- 1 押木秀樹 他「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」／『書写書道教育研究 第17号』2003.3
- 2 小林比出代「硬筆筆記具の執筆法と字形の関係における分析的研究」／『書写書道教育研究 第19号』2005.3